



しずかな日々

広尾中学校 三年二組 土切 逸香

卒業まであと約七ヶ月。私はこの本を読み、四月から始まった最後の中学校生活を損しているような気持ちになりました。

この本を読もうと思ったきっかけは本屋さんに行った時に本の帯に入試問題に出る作品第一位と大きく書かれてあったからです。受験生である私は、少し気になり読もうと思いました。

この物語は主人公の枝田、通称「えだいち」と出席番号が後ろの押野が、えだいちのおじいさんに出会いどんどん大人になっていく姿を描いています。

えだいちには仲の良い友達がいまいませんでしたが小学校四年生から五年生に進級した始業式の帰り際、押野に野球に誘われます。野球をする三丁目の空き地には他校の子や学年の違う子四、五人が集まっています。野球をするには人が全然いないけれど、みんなガッツリ野球をするというよりは、三丁目の空き地に来てみんなという時間を楽しむという雰囲気です。キャッチボールやゲームをして遊んでいます。えだいちには野球経験ゼロ。学校の体育の授業くらいでしかやらないため、ボールはホームベースまでとどかずに、空振りだらけ。ダメダメなえだいちにみんなは「ヘタッピだな」とか「センスなし」など言いましたが、えだいちには全く傷つかず、むしろ嬉しくて楽しかったようです。なぜなら今までに汗をかいて服を汚してまで友達と遊んだことがなかったからです。そ

これはえだいちにとって初めての経験でした。えだいちは「あなたのターニングポイントはどこですか」と聞かれたらこの日の事を答えるほどえだいちにはものすごく強い印象だったようです。私達にとってはただ遊んで楽しいという思いが、えだいちにとっては特別だったようです。

その後えだいちはおじいさんの家に住むことになります。おじいさんは口数が少なく物静かな人で見たい目は怖そうですが本当は優しい人です。おじいさんと長く生活することでおじいさんとの思い出や、押野や三丁目の空き地で一緒に野球をする仲間との思い出がたくさんできています。

そして一番最初に書いたように、自分が損をしているのではないかなということが二つあります。

一つ目は仲間と出会えたことについてです。どういふことかとうと私たちは偶然同じ年に産まれて同じ地域に住んで、同じクラスになって・・・など偶然が重なり、今学校で生活しています。この偶然を当たり前のように何も感じず生活していたことが損だったなと思いました。えだいちはおじいさんに出会い、どんどん世界が変わっていききました。私も中学二年生になった時に広尾中に転校して最初の方は今のよりに仲の良い友達はいませんでした。みんなは私のことをどう思っているのかなど周りの目が怖かったりして、色々な不安がありました。しかし行事などを通して徐々に心配していたことや不安がなくなり、今では仲の良い友達ができ、たくさんの人と仲良くなることができました。そしてよくみんなに「逸香は一年生の時から一緒にいるような気がする

る」と言われます。私はこれを聞くと最初に心配していたことや不安がバカバカしく思えてしまいます。私は今、とても恵まれた場所にいるんだなと感じます。みんなとの出会いに感謝しています。この感謝の気持ちを忘れずにあと約七ヶ月を大切に過ごしていきたいなと思いました。

そして二つ目に損をしているなと感じたことは小さな思い出を忘れてしまうということです。人間は印象深い思い出ばかりを覚えていきます。そして何気ないちよつとした記憶や思い出は忘れてしまいます。しかし私はこの本を読み、帰り道のできごとや遊んだことなど、今しかできないことをやり、その小さな思い出も忘れずに心の中にしまっておきたいと思っています。大人になった時に、「こんなことがあったな」とか、「くだらないことをしたな」など、楽しかった思い出に浸れるようにしたいなと思いました。

この本を読んで私は今まで深く考えなかったようなことを考え直すことができ、当たり前前のことを幸せに感じるようになりました。私達は一緒に生活する中で慣れというものができて、今こうして生活できているのも当たり前前のようになっています。なぜこうして生活できるのか、学校に通えるのかということを考えてみると、自分は恵まれていると思いきや幸せになります。そしてこの幸せが増えたら世界はより平和になり、みんながみんなを思いやる気持ちが増えると思います。そして十年後、二十年后には誰もが幸せで、平和な世界になることを願っています。